

出江 紳一 教授 肢体不自由学分野

【演 題】回復する身体と脳

【略 歴】

- 1983年 3月 慶應義塾大学医学部卒業
- 1983年 5月 慶應義塾大学病院研修医
- 1985年 5月 国立療養所村山病院
- 1987年 5月 藤田保健衛生大学病院
- 1988年 5月 慶應義塾大学医学部助手
- 1991年 5月 静岡市立静岡病院
- 1992年 6月 ニュージャージー-医科歯科大学関連病院ケスラーリハビリテーション研究所
- 1993年 9月 慶應義塾大学医学部助手
- 1995年 4月 東海大学医学部講師
- 1999年 4月 東海大学医学部助教授
- 2002年 8月 東北大学大学院医学系研究科教授
- 2008年 4月 東北大学大学院医工学研究科教授
医工学研究科副研究科長（併任 ～2011年3月）
- 2011年 4月 東北大学教育研究評議員（併任 ～2014年3月）
- 2014年 4月 東北大学大学院医工学研究科長（併任 ～2017年3月）
- 2023年 3月 退職



【研究業績等の紹介】

出江紳一教授は、1983年に慶應義塾大学医学部を卒業され、リハビリテーション医療の対象領域全体を網羅する研修を経て米国ニュージャージー医科歯科大学に留学、経頭蓋磁気刺激法を用いた運動制御の研究に従事されました。帰国後に除神経筋の電気生理学的研究により博士号（医学）を慶應義塾大学より授与され、東海大学講師、助教授を経て2002年に東北大学大学院医学系研究科教授に就任されました。

出江教授の専門は中枢性運動障害の診断と治療であり、電気生理学、脳画像、心理物理学などの手法を用いて中枢神経系の可塑性と身体性の理解に立脚した回復の原理を探求してこられました。2014年から2019年までの新学術領域研究「脳内身体表現の変容を用いたニューロリハビリテーション」ではリハビリテーション医学班の班代表を務めるなどして、システム工学者や神経科学者との連携により自己身体への注意を介する運動機能回復原理を提案しました。

出江教授は病む人への深い共感をもち、教授就任直後から対話に基づく患者中心医療の研究に注力しました。コミュニケーションの研究には介入構造を明確にする必要があることから、対話的コミュニケーションである「コーチング」に着目し、脊髄小脳変性症者に対する電話によるコーチングの構造と機能を明らかにしました。それに続いて、脳卒中患者を診療する医師に対するコーチング研修、介護予防に従事する保健師職に対するコーチング研修、さらに理学療法士・作業療法士・言語聴覚士の養成校におけるコーチング授業を実施し、診療におけるコミュニケーションの重要性や研修・授業の効果を明らかにしてきました。

出江教授は2008年から医工学研究科教授として医工融合による先端技術の社会実装に尽力されました。その成果の一つとして末梢神経磁気刺激（パスリーダー™、IFG社、仙台）の開発があります。脳内身体表現の形成と密接に関わる固有受容感覚入力を増やす手段として、皮膚の痛覚神経を興奮させずに深部の固有感覚神経を活動させる磁気刺激に着目し、既存の経頭蓋磁気刺激装置の課題を解決し現場のニーズに合わせて末梢神経刺激に特化した新しい磁気刺激装置の商品化に成功しました。IFG社は本装置の開発と医療機器認証取得により2016年、はばたく中小企業・小規模事業者300社技術部門に選定されました。

出江教授は回復の原理を身体と脳とのつながりの中で考え、病む人の主体化という視点をもち、研究成果を医工融合により社会に届けることに取り組みました。そして様々な分野・立場の人たちと一緒に考えることにより、伝統あるリハビリテーション医学に新しい考え方や手法を創出しました。